

ブツダガヤ



手前がお釈迦様が悟りをひらかれた菩提樹、後ろが大塔。ブツダガヤは田舎なので、遠くからこの塔を見ることが出来た。

学生のころから仏教に興味をもち始め、その間、そうだと納得することとよく分らないとおもうこととの間を蛇行してきたように思うが、ずっと続けてきたことだけはよかったですと今思っている。

お釈迦様仏教徒は釈尊成道の地ブツダガヤを目指すということ、かの地を訪れた。もう二十数年前のことである。

ブツダガヤには鉄道の駅ガヤで乗り換えて陸路を行かなければならない。ペナレスからの列車が大晦日の夜暗くなってからガヤに着いた。町は暗かったがそこに人がうごめいていた。食べ物の店にたむろしているインド人が我々四人を探るような目つきで見ているのが分かったが、不安は全くなかった。

ガイドブックを頼りに探しあてた安宿の受付には全盲の青年がいて、奥にある部屋に行けというふうには彼は無言で廊下の奥を指さした。シャワー（水しかでない）とトイレは部屋の外にあり共同使用であった。コンクリートの床にベッドが五つだけある。ベッドの四隅に三センチ角の高さ一メートルくらいの高さがたっていたので、シーツの上に老いてあった蚊帳を四本の棒に架けて寝た。

朝起きて窓を開けると道路がすぐそばにあった。インドの喧噪が部屋に飛び込んできた。

今日一月一日、日本で言えば正月である。

ガヤの駅で馬車屋と値段の交渉をしてブツダガヤへ向かう。昔の大八車を少し小さくしたくらいの台車に手すり低い椅子を付け、クッションをよくしたのが乗るところで、それを馬が引いて走る。我々四人は長いすに座って外を眺める。子供が「バクシーシー、バクシーシー」と金をねだってわれわれの馬車を追いかけてきた。子どもが走って（それでもけっこう頑張って）追いつく程度の速さなのでいつまでも付いてくる。たまりかねて四人のうちの一人がコインを投げた。

ガヤからブツダガヤまでは一三キロの道のりである。道は尼連禪河にそって延びていた。苦行は悟りへの道ではないと苦行を捨てる決心をされたお釈迦様は村の娘スジャータから食事をうけとり、この尼連禪河で沐浴をされ、最後の瞑想にはいられたと伝典は伝えている。

ブツダガヤは一大観光地であった。巧みに日本語を操る大人や子供、みんな土産もの

を売らんとして迫ってくる。

後年アシヨカ王が立てた大塔が聖地のなかで聳え立っていた。塔に向かう参堂で五体投地を繰り返す巡礼者を大勢見る。

お釈迦様がその下で悟りを開かれたという菩提樹の樹は確かにあった。ああここかと思つた。なにか区切りがついたような、安心したような、長い間思い続けていたことが実現したのにあっけない出来事だつた。

なぜ聖地に行きたいと思うのだろう。このあと、初めて説法されたサルナートにも行つた。いまだ実現していないが、お生まれになつたルンビーニや入滅の地クシナガルにも行きたいと思つている。聖地で何を確認したいのか。来ましたよと伝えたいのか。

ブツダガヤに三日滞在し、ガヤに今度は一人で歩いて帰つた。これは来る前から決めていたことで、成道のあと説法に向かわれたお釈迦様の真似を少しだけしたかつたからである。来るときはあれほど、「ルピー、ルピー」と追つてきた子供たちも、リュックを担いで歩いている外国人に「ナマステ」と元氣よく挨拶するだけであつた。

(二〇〇六年一月二八日)